

論文の和文要旨	
論文題目	現代ビルマ語における指示詞の研究 —現場指示、文脈参照現場指示、文脈指示をめぐって—
氏名	トゥザ ライン
<p>本論の目的は、現代ビルマ語における口語体指示詞と文語体指示詞を体系的にまとめ、指示詞の全体像を示すことである。ビルマ語の指示詞は指示限定詞と指示代名詞の2つに分けることができる。指示限定詞としては <i>di</i>, <i>ʔédi</i>, <i>hò</i> がある。指示代名詞は、更に位置指示代名詞の <i>di</i>, <i>ʔédi</i>, <i>hò</i> と非位置指示代名詞の <i>dà</i>, <i>dihà</i>, <i>ʔédà</i>, <i>ʔédihà</i>, <i>hòhà</i> (<i>hǎwà</i>) に分けられる。指示代名詞の <i>dihà</i>, <i>ʔédihà</i>, <i>hòhà</i> は指示限定詞と形式名詞 <i>hà</i> が複合した形式であり、「これ (=この+もの)、それ (=その+もの)、あれ (=あの+もの)」に相当する。更に <i>dihà</i>, <i>ʔédihà</i> には融合形式の <i>dà</i>, <i>ʔédà</i> がそれぞれ存在する。文語体ビルマ語の指示詞としては <i>ʔi</i>, <i>tʰò</i>, <i>yín</i>, <i>lǎgáun</i> の4つの形式が挙げられる。本論では、そういった口語体と文語体指示詞の全体像を考えた。</p> <p>指示詞の用法は一般的に現場指示と文脈指示とに分類される。ビルマ語においては、現場指示用法としては、指示対象が話し手に近いと感じられる場合を「近称」と話し手から離れている対象や離れていく対象と遠くにある対象を指す場合を「遠称」と考えることができる。文脈指示用法としては前方照応と後方照応とがある。</p> <p>ビルマ語は、主として発話に用いられる口語体と、書記に用いられる文語体とがあり、助詞類のセット、もしくは名詞や動詞などの使われる単語が異なる場合もあると先行研究で指摘されている。しかしながら、両者の間に、必ずしも、明確な区別があるわけではない。口頭言語であっても、演説などは、かなり文語的な調子を帯びるものである。藪 (1992) の言うように、ビルマ語の指示詞は文体の違いに大きく関与している。</p> <p>ビルマ語の指示代名詞については岡野 (2011) の分類に従って、位置指示と非位置指示とに分けて考えた。指示限定詞を含めた分類は以下のようになる。</p>	

表 1 口語体指示詞の分類

語類		指示詞			
指示詞	指示限定詞	dī + N 「この」	ʔéđi + N 「その」	hò + N 「あの」	
	指示代名詞	位置指示 代名詞	dī + CM 「ここ」	ʔéđi + CM 「そこ」	hò + CM 「あそこ」
		非位置指 示代名詞	dà/ dīhà (+ CM) 「これ」	ʔédà/ ʔéđihà (+ CM) 「それ」	hòhà (hǎwà) (+ CM) 「あれ」

※CM=CASE MARKER

表 2 文語体指示詞の分類

語類		文語体の指示詞				
指示詞	指示限定詞	ʔi + N 「この」	tʰò + N 「その」	yín + N 「その」	lǎgáun + N 「その」	
	指示代名詞	位置指示 代名詞	ʔi + CM 「ここ」	tʰò + CM 「そこ」	yín + CM 「そこ」	lǎgáun + CM 「そこ」
		非位置指 示代名詞	ʔi (+ CM) 「これ」	tʰò (+ CM) 「それ」	yín (+ CM) 「それ」	lǎgáun (+ CM) 「それ」

口語体のデータについては小説の会話部分に加え、ビルマ語の母語話者の自然会話データを収録し、分析を行った。その結果、先行研究で「中称」などとされていたʔéđi/ ʔédàを遠称のひとつと位置づけ、dī/ dàを「近称」、ʔéđi/ ʔédàと hò/ hòhàを「遠称」とした。文脈指示においては、それぞれ dī/ dà、ʔéđi/ ʔédàと hò/ hòhàに前方照応と後方照応の例があることを示した。また、dī/ dàとʔéđi/ ʔédàは物理的距離の違いを区別する場合のみならず、心理的な距離がかかわる場合にも用いられる。dī/ dàは心理的距離が近いと感じられる場合に用いられ、ʔéđi/ ʔédàは指示対象に対して心理的距離があると感じられる場合、あるいは、指示対象との間に距離を置きたいと思う場合など、指示対象に対する自己の関わりが強いと感じられない場合に用いられる。それに加え、hò/ hòhàは遠い過去を指すのに対し、dī/ dàは近い過去と近い未来を含む現在の位置を指すことを示した。

文語体指示詞の考察では、キッサン文学が興隆した 20 世紀初頭から現在までの文献を中心としたデータを使い、指示限定詞と指示代名詞との 2 つに分けてʔi, tʰò, yín, lǎgáun の記述を行った。文語体指示詞のʔi と tʰò は文脈指示のみならず現場指示相当用法としても用いられるのに対し、yínとlǎgáunは文脈指示の表現のみであること、非位置指示代名詞としてのyínとlǎgáunは物を代替して表現する場合のみならず、直接に人間や動物を代替する場合にも用いられることなどを指摘した。ʔi と tʰò の使用としては、ʔi は前に述べた説明や内容などをまとめる際によく使われるのに対し、tʰòは前に述べた物や事柄などを更に展開する場合に使われることが確認できた。

また、口語体のꨀꨃꨀ ꨀꨃꨀ の機能を再検討し、文脈参照現場指示という用法の存在を示した。これまでの指示詞の研究に採用されてきた指示用法には現場指示(直示)と文脈指示という2つの用法がある。この2つの用法により、現場指示用法は言語的先行文脈が必要ではなく、文脈指示用法は先行文脈が必要(堤 2012 など)という考えが一般に受け入れられている。しかし、このようによく知られている現場指示(直示)用法と文脈指示用法の分類基準でビルマ語の指示詞を説明するには不十分である。本来現場指示は先行文脈が存在しない。現場・眼前にある指示対象を何の前提もなしに直接指し示す場合に用いられる用法である。これまで多くの指示詞の研究に採用されてきた現場指示(直示)と文脈指示が、場合によっては切り離せない状況にあるということが挙げられる。そのため、従来の指示用法の分類基準に現場指示(直示)と文脈指示のほか「文脈参照現場指示」用法を設けることを提案し、ビルマ語の現場指示を次のように分類した。

表 3 指示の分類

現場指示 (直示) Deictic		文脈指示 Anaphoric			
(純粋な)現場指示 (pure) Deixis	文脈参照現場 指示 Context-referring deixis	文脈指示 Anaphora			
		談話文脈 discourse		文章文脈 textual	
		前方照応 anaphora	後方照応 cataphora	前方照応 anaphora	後方照応 cataphora

従って、口語体における現場指示と文脈指示を関連づけると、現場指示の場合、それぞれ *dī*/*dà* と *hò*/*hòhà* が話し手の近くにある対象と話し手の遠くにある対象を指すことから、文脈指示においても *dī*/*dà* は近くや直前あるいは直後にある文脈を照応し、*hò*/*hòhà* は遠いところの文脈内の要素にまで照応することが可能だと考えることができる。そしてꨀꨃꨀ/ꨀꨃꨀ は現場指示の場合は話し手から離れる場合に用いられることから、文脈指示の場合は心理的距離が置かれる場合にみられると考えられる。

最後に、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *dī* が日本語の「この」という意味と「今の」という意味を持っていることについて考察し、特に *dī* が「今の」という意味として解釈される条件を確認した。その結果、1) 現場指示の指示限定詞 *dī* が指している時点の時間的位置が現時点を指す以外に近い過去を指す場合があること、2) 「今の」の意味として解釈される場合に時間のズレが生じること、3) 「今の」の意味として解釈される場合に旧情報や共有知識といった暗示的な文脈情報(照応)が付け足されること、4) 以上の1)~3)のような近い過去を指す場合、時間のズレが生じる場合と、暗示的な文脈情報を必要とする場合の *dī* を「文脈参照現場指示」用法に分類すべきこと、5) こういった現象は「文脈指示(照応)は現場指示(直示)から派生した」というより、文脈情報(照応)が存在しているからこそ現場指示的な用法が使用できることなど新たな言語事実および観察を示した。

以上をまとめると、ビルマ語の指示詞の全体像は表4のように考えることができる。

表4 ビルマ語の指示詞の全体像

語類		指示詞			
指示詞	指示限定詞 「指示詞+N」	ʔi-	ʔò-	yín-/ lǎgáun-	
		dī-	hò-/ ʔéđi-	ʔéđi-	
		「この」	「あの/その」	「その」	
	指示代名詞	位置指示代名詞 「指示詞+ CM」	ʔi	ʔò	yín/ lǎgáun
			dī	hò/ ʔéđi	ʔéđi
			「ここ」	「(あ)そこ」	「そこ」
		非位置指示代名詞 「指示詞 (+ CM)」	ʔi (ʔǎyà)	ʔò (ʔǎyà)	yín (ʔǎyà)/ lǎgáun (ʔǎyà)
			dà (/dihà)	hohà/ ʔéđà (/ ʔéđihà)	ʔéđà (/ ʔéđihà)
			「これ」	「あれ/それ」	「それ」
				yín/ lǎgáun	
				—	
				「彼/彼女」	

また、現場指示における遠近性は次のようにまとめることができた。

表5 現場指示における遠近性

遠近性	口語体	文語体
近称	dī, dihà, dà	ʔi
遠称	遠称②	ʔéđi, ʔéđihà, ʔéđà
	遠称①	hò, hòhà, hǎwà